

平和記念式典の前日。私は、式典の会場横にある、平和記念資料館を見学しました。その中に、亡くなった児童たちの写真と最後の言葉が展示されているのを見て、胸が苦しくなりました。一番、心をえぐられたのは、十二歳の男の子の言葉でした。

「死体だと間違われて焼かれてしまうと思い寝なかったんだ。」

この一言から、原子爆弾で亡くなられた方々のご遺体、焼け野原となった広島市のありとあらゆる所にたたずんでいる光景が目につかぶのです。私は、怖くなって思わず下を向きました。しかし、「助けて」と叫ぶ声が聞こえてくるようで、その日は満足に眠ることができませんでした。

式典当日。会場には多くの方々が参列していました。式典では、資料館とは違い、言葉で原子爆弾がどれほど恐ろしいものなのかを広島市議会議長をはじめ、国際連合事務総長の方々が証言してくださいました。そして、国際連合事務総長は、新たな軍拡競争の加速について、

「人類は、実弾が込められた銃で遊んでいるのです。」

とおっしゃいました。つまり、人を傷つけたり、殺すことを遊びと認識しているということだと思います。また、国際連合事務総長は、「今こそ、平和を拡散させるべきです。」

と訴えていました。

みなさんは、インスタグラムやツイッターなどで何を拡散しますか。日本のすぐ隣で、原子爆弾が使われようとしています。ロシアによるウクライナ侵攻は他人事ではありません。明日の平和のために、自分も周りの人も大切に、互いに助け合うべきです。今こそ平和を拡散させましょう。

核なき世界へ

さかのい みやび

新発田市立第一中学校三年 坂野井 京雅

広島の実爆資料館には、目を背けなくなる嘘のような事実が残されていました。原爆の熱戦によって、全身の皮膚がただれ、肉が見えるほどに火傷を負った子どもの写真がありました。その子は被爆し、耐えられないほどの激痛を感じながら病院へ駆け込んだのですが、助からなかったそうです。一九四五年八月、原子爆弾によって五十万人もの人が命を落としたということを、私は実際に広島に行って実感することができました。

平和記念式典では、被爆した方のお話を聞き、世界の平和に対する強い思いを感じました。それと同時に、今の世界は本当に平和の実現に向けて進んでいるのだろうかという疑問が私の心に浮かんできました。

「核の抑止力」という言葉があります。これは、核兵器を持つことが、戦争の回避につながるという考え方です。しかし、それは核兵器を正当化する理由にはなりません。核兵器がある限り、使わないという保証はどこにもないからです。今も核兵器を保有している国が多いという事実を前にして、平和な世界を実現するために私たちは自分ごととして考える必要があるのではないのでしょうか。

私たちにできることは、まず世の中で起きている事実を知ることです。世界の歴史や今起きている出来事に関心を持ち、自分の考えをもつことが大切だと思います。

また実際に行動することもできるでしょう。SNSで発信したり、核廃止を目指す政治家に投票したりするなど、核兵器廃絶に向けて実際に行動を起こすことができます。

そして何よりも、相手の立場に立って考え寄り添うことが大切です。友人と考えるの違いから言い合いになることがあっても、お互いに理解しようと寄り添うことで分かりあうことができます。

身近な人との対話を続けた先に、きっと戦争のない平和な世界が生まれるはずです。

広島平和記念式典派遣事業に参加して

ひさざき ゆうたろう

新発田市立猿橋中学校三年 久崎 裕太郎

「助けてください。」「水をください。」「そんな声がいたるところから聞こえる、七十七年前の広島。一つの爆弾によって、十二月末までには約十四万人もの人が亡くなった。

私は広島に行くまで、原爆の恐ろしさについて教科書などに書いてある表面上のことしか知りませんでした。しかし、実際に原爆ドームや原爆資料館を訪れて、原爆の現実を見ることで、原爆の恐ろしさを肌で感じることができました。

今回の派遣事業に参加して、もし自分や自分の周りでは広島のような悲劇が起きたらと、考えずにはいられませんでした。当たり前『日常』を奪われる悲しさや悔しさに私なら耐えきれずに、相手を憎んでしまうと思います。しかし、広島は違います。

広島平和記念式典は、原爆死没者の追悼だけでなく、原爆投下について忘れないために開かれています。「原爆投下について忘れない」とは、もう二度と原爆による悲劇を起こさないために、あの日のヒロシマを忘れないということです。広島は憎しみの連鎖を断ち切り、式典に世界中からたくさんの人を招き、原爆の事実を伝えていくなど、その行動力を未来へ向けています。私はこのような行動が平和な世界を築くために大切なのだと気が付くことができました。

現在も核の脅威はなくなるところか、より高まっています。もし使用されれば、私達のかけがえのない『日常』は奪われてしまいます。核廃絶が実現できるよう、私は自分が感じた原爆の恐ろしさをたくさんの人に伝えていこうと思います。そして、みなさんも原爆が起こした悲劇について考えてみてください。

広島平和記念式典への参加を通して感じたこと

やまだ かい

新発田市立東中学校三年 山田 快

一九四五年、八月六日、午前八時、核兵器のボタンが押された瞬間、数多くの罪なき人たちの命が奪われました。私はこの広島平和記念式典を通して教科書やテレビなどでは知ることができない原子爆弾が投下されたあの日の出来事について深く考える貴重な体験をしました。

私が一番原爆の恐ろしさを感じたのは資料館でした。黒い雨が降っている絵や目の治療を受けている写真、黒焦げになったボロボロの衣服。どれも恐ろしくてしっかりと見る事ができませんでした。その中に「写真を撮ることをためらったがやっとの思いでシャッターをおろした。」と書かれてある写真がありました。私だったら絶対に取らないと思います。しかし、このカメラマンはシャッターを下ろしました。何が決断の決め手になったのだろうか。私は考えました。このカメラマンは何を伝えたかったのか。きっとシャッターを下ろすことで原爆の恐ろしさをたくさんの人に伝えることができる。そして、この写真の世界中の人見てもらいたいと考えたからだと思いました。

私は、今回学んだことをたくさんの人に伝えることが大切だということ強く感じました。それが最も重要なことであり、被爆者や資料館の写真が伝えたいことだと思いました。原爆投下のように核兵器を使用するのは紛れもなく人です。しかし、これを止めることができるのも人しかいないのです。戦争の恐ろしさ、平和の尊さを世界中の人がしっかりと心に置き、私たちには何ができるかを考えることが必要なのです。核兵器を所持することをやめ、今起きているウクライナでの戦争や数々の紛争をやめてください。二度と恐ろしい戦争が起きない平和な世界が、今も、そしてこれからも起きないことを願います。

新発田市立川東中学校三年 荻原 大馳

一九四五年八月六日八時十五分に広島に原子爆弾が投下され、約十四万人もの尊い命を奪い、広島を火の海としました。

「目を開けて、目を開けて」と子どもの名前を呼び続ける母親。「助けて」「水をちょうだい」と動く気力もない母親にすぎない。広島にいたるところで悲しい叫び、魂の叫びがありました。

惨禍の中を生き延びた後も、人々は多くの困難や苦痛に直面しました。それは、後遺症と差別です。被ばくによる後遺症でたくさんの方が命を落としました。また、原爆に対する無理解によって被ばく者は差別にも苦しめられました。

あの一瞬がもたらした悲しみや絶望、あの一瞬で壊された穏やかな日々、幸せな日々。原子爆弾は私たちの生活を一瞬で奪うものです。

私は平和記念式典を通して、今送ることができる日常がとても大切だと感じました。また、核兵器は私たちの日常を奪い、不幸にするものだと感じました。そうした戦争や核兵器のない世界にしていかなければいけません。しかし、核兵器を保有している国が存在しているのが現状です。唯一の被爆国である日本が原子爆弾の怖さ、恐ろしさを世界に発信していかなければなりません。その役割を私たち若者が受け継ぎ伝えていくことが大切だと改めて思いました。

広島に行き感じたこと

なかの ようた

新発田市立七葉中学校三年 中野 陽太

私は、八月の六、七、八と三日間広島に行ってきました。広島に行く前は、何度か授業で戦争について勉強しており、分かっていると思っていました。しかし、この二日間を通して自分事として感じられるようになりました。

一日目は広島平和記念資料館に向かいました。入ってすぐ原爆の怖さが伝わってきました。焼けた人の写真や絵、治療されている人や亡くなった方が運ばれている映像。怖くて目をそらしたくなる物もありました。実際にあった事だと信じられない程の残酷さでした。二日目は広島平和記念式典、灯籠流しがありました。どちらからも人々の平和を祈る気持ち強く伝わってきました。

このたくさんさんの経験を得て、私は戦争は二度とあってはいけない、忘れてはいけないことだと感じました。何が起こるか考える暇もなく落とされた爆弾。家族、友達、大切な人との別れの時間すら許さず全てを奪った原爆。こんな物があって良いのでしょうか。現在、世界の核兵器保有数は、合わせて約一万二千七百発、一発で日本全体を破壊する威力のものもあります。これが今の世界の現状です。この状況を少しでも変えるには、私たちがたくさんの人に原爆、戦争の恐ろしさを伝えていくことが大切だと思います。今、私たちは何ができるか、これからも考えていきたいです。

広島平和記念式典の感想

たきもと かずき

新発田市立佐々木中学校三年 滝本 一輝

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に一つの原子爆弾が投下されました。たった一つの原子爆弾によって、たくさんの命が奪われ、広島町は死体で溢れ、まさに地獄となりました。

このようなことを二度と繰り返さないために、私たちは、「自分は何ができるのか」を考え、実行しなければなりません。

広島平和祈念式典には、たくさんの方が参列していて、中には、他の国から来ている人もいました。私はその光景を見て、「日本の人だけでなく、世界中の人が平和を願って参列しているんだ」と思いました。また、式典では「平和への誓い」と言うものがあり、こども代表の小学校の子が大勢の人の前で平和を誓っていました。私は、それを見て、「小学生でも平和について考えて、大勢の人に平和を訴えかけているのに、自分は何もしていないじゃないか。自分には何ができるのか」と考えました。私は、原爆の苦しみを経験したことはありませんが、今までに勉強してきたこと、式典に参加して学んだことなど知っていることは多くあります。私はそれらを色々な人に話し、平和について皆で考えを深めることが、世界中の人々が平和を考えることに繋がっていくと思いました。

私は広島に行き、原爆の恐ろしさや悲惨さを改めて実感しました。世界から核がなくなり、いつか世界中が平和になることを願っています。

新発田市立豊浦中学校三年 本間 雛希

ほんま ひなの

私たちは生きていく中で、多くのことを経験し記憶します。しかし、時間が経つにつれて忘れてしまいます。被爆した方々は七十七年経った今でも当然のように覚えていて、原子爆弾がどれほど恐ろしいものなのかを、私たちに伝えてくださいました。特に大切な人を失い、何年も後遺症に苦しむ方のお話は心が痛みました。

私は写真を見たりお話を聞いたりすることを通して「日々の生活」がどれほど幸せかを改めて感じました。

話を聞いた後の私は、家族そろってご飯を食べたり、友達と楽しく話したりする平凡な日々が、実はとても幸せなことだと気づきました。昔の人々が望んでいた平和な生活は、今の私たちの生活そのものでした。また、この幸せは平和がある今の時代だからこそ感じられるのかもしれないと思いました。平和を保ち続けるには、過去の悲惨なことについてよく考え、自分自身に照らし合わせていく必要があります。なぜなら、私たちの平凡な一日は、昔の人々にとって幸せで、この幸せがいつまでも続いてほしいと思えるからです。

これから、平和の尊さや二度と苦しく辛い思いをする人を出してはいけないという思いを後世に伝えていく役目を私たちが責任を持って果たしていきたいです。

七十七年前の八月六日午前八時十五分、広島の上空に一つの原子爆弾が投下されました。私は広島資料館や原爆ドームを訪れ、その被害を知ることができました。「戦争はあってはいけない。」と分かつてはいたけれど、それ以上に多くのものを奪う恐ろしさを感じました。

資料館では熱戦によって火傷を負った人々や、黒焦げになった死体の写真や衣服などが展示されていました。どれも目を疑うようなものばかりでしたが、私が一番印象に残っているのは、爆した家族のお話です。そこに書かれていたのは、自分にとって大切な人が次々に亡くなっていく現実でした。もし、自分の家族や友達がと思うと、そして、当時の被害を受けた人々がどれほど悲しい思いをしたのか想像するとつらい気持ちになりました。

原爆ドームでは、たくさんのレンガが崩れ落ちていて、原爆の破壊力について認識することができました

私は、広島の派遣を通して、一瞬で命や当たり前の日常を奪った原爆の恐ろしさを知りました。新潟も、原爆投下の候補地だったそうです。もしも新潟に原爆が落ちていたからと思うと、とても怖いです。

私は、今ある平和な日常に感謝し、家族や友達を大切にしていきたいです。そして、原爆の恐ろしさを語り継ぎ、日本から世界の人々へ平和についての考えを広める架け橋になっていきたいと思いました。

広島平和記念式典への参加を通して感じたこと

もりや ちはや

加治川中学校三年 森谷 知生

「ゴーン、ゴーン」

平和の鐘が鳴り響いています。

広島平和記念式典に参加して感じたことは戦争や核の脅威は過去のものではなく、現在、そして未来の問題だということです。

世界ではいつもどこかの国で戦争をしています。やがて平和が訪れても、また別のどこかの国で争いが始まります。人間は懲りることなく、これを繰り返してしまっています。

私たちは学校で歴史を勉強していますが、その意味を一人一人がもって考えなければならぬ、式典に参加してその思いを強くしました。

今、日本は平和です。しかし、それはいつまで続くか分かりません。世界では内戦、紛争が絶えず、ついにロシアとウクライナの戦争が始まってしまいました。

核の脅威をちらつかせながら、相手を威嚇したり、屈服させようとしたりする外交は平和どころか緊張感を高めるばかりです。日本も他人事でないのです。

戦争が生み出すものは悲しみだけだということをほとんどの人が知っているにも関わらず、戦争は無くなりません。

どうしたら戦争は無くなるのでしょうか。

私たちにできることは「社会情勢に関心を持つ」ということです。決して他人事ではないという当事者意識を一人一人が持つことが平和への第一歩だと考えます。

平和は総理大臣だけでは作れないのです。